

〈眠りについて〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

題名の意味は、①「いかにも知っているようなふりをする」と辞書にある。え？私はまた、②の「ぐっすり寝込んでいて何も気づかないこと」だけかと思っていた。ついにながら、①は「京都見物をしてきたと嘘をついた者が、白河のことをたずねられ、川の名と思い込んで、夜船で通ったとき眠っていたので知らない」と答えた話から出た話」とも。

この映画は、人気作家吉本ばななの初期の小説が原作だが、原作者は①、②どちらのつもりでこの題名をつけたのだろう。言うまでもなく②の意味でしょうーかな？

何しろ、ヒロインの寺子(安藤サクラ)はよく眠る。映画の冒頭から、眠っているところを携帯電話で起こされる。「また寝てたでしょう」とささやく声の主は、恋人・岩永(井浦新)だ。「会おうか」「うん」で、待ち合わせはいつもの「橋の上」。渋谷駅東口前の大きな立体

歩道橋の真ん中の、ネオンと騒音に囲まれて宙づりになった大都会の橋。

こうして、全く何の問題もなくするとコトが運ぶカップルだが、実はふたりはまるで共通点がないほどに違っている。寺子は岩永とは不倫関係で、いくら付き合っても結婚は別だ。岩永の妻は交通事故でずっと植物人間状態であり、岩永は見舞いにも行くし、妻の実家の「すごくいい人たち」である家族とも付き合っている。

昼間から寝ても寝ても寝足りないほどよく寝る寺子は、若い身空で仕事もせず、毎日ただ岩永からの電話を待っている。生活費はどうしているのか、見る方がつい老婆心を出したくなるような生活だ。そんなこと気にもしないで、寺子は気持ちよさそうに眠っている。

寺子の親友・しおり(谷村美月)は眠ることを仕事にしている。寺子によれば「手の込んだ売春みたいなこと」と呼

ばれる「添い寝」だ。そういう商売が実際にあるのかどうか。それは例えば川端康成の小説『眠れる美女』を原作にした『官能サスペンス』と呼ばれる同名のドイツ映画の、金持ちの老人向け秘密の館での秘め事の場面を連想させる。しおりの仕事はそうしたものでかどうかは本人のセリフからは定かではないのだが。見知らぬ男たちの傍で寝ることで報酬を得るには、代わりに何を提供するにしてもその眠りが穏やかなものではありえないだろう。そして、岩永の妻の眠りには終わりが無い。

三人の女性の眠りを比べれば、奇妙なことに、はじめ怠惰とさ見ええた寺子の眠りが、まだ人問らしく、健康的とすら思えてくる。それがあらぬか物語の終わり近くに、寺子は初めてデート以外の外出をし、何と不特定多数の男性を相手に街頭アンケート調査をして、現金を稼いでくる。十分な眠りでまともに生きる元気が出てきたのだろうか。岩永と連れ立って、隅田川の花火を見上げる小さな幸せ。だが、寺子は岩永になぜかしおりの不可解な自殺のことは、言えないまま己主張するでもなくゆらゆらと不安定に生きてゆく寺子は、現代の若い世代の典型なのだろうか。

『白河夜船』

日本映画 (91分)

監督: 若木信吾

出演: 安藤サクラ、谷村美月、高橋義明、紅甘、竹厚綾、伊沢磨紀、井浦新

公開中

© 2015 よしもとばなな / 『白河夜船』製作委員会

